

年史編纂の意義再考

院長 飯 謙

『学院史料』第1号は1983年に発刊されました。その冒頭で院長の岡本道雄先生は、この冊子が「次の『百五十年史』、『二百年史』のため」と書いておられます。神戸女学院は2025年10月に創立150周年を迎えます。それを前に現在、『150年史』編纂の作業が進行しています。『学院史料』の地道な作業を知らされます。現在は歴史研究の専門家であられる河島 真文学部教授のご指導を仰ぎつつ、執筆要領を定め、具体的に目次を立て、各項目のとりまとめ担当者、執筆者の割り振りを決定し、編集過程の方向づけがなされつつあります。実務を担当してくださっている皆様に(まだ作業の途上だが)改めて御礼を申し上げます。

すでに本誌でも報告したことですが、本学院では2016年4月に年史編纂委員会を設置しました。その一年ほど前から史料室専門委員会を中心に準備を重ね、委員会規程を定め、法人組織をあげての取り組みを開始したのです。委員会では最初に、①創立100年までは(新資料を除き)『100年史』を簡略して記載し、『150年史』では、主に100年から150年(少なくとも記念式)までを取り扱う、②原則的に執筆は現職者があたる、③編纂作業をサポートできる専従者採用などを骨子とする体制の構築等を決定します。当初はしばらく他校の年史を研究し、学院関連の資料を発掘するなど、「150年史」に向けての基礎工事となる作業に向かいました。その後、担当者の退職による変更やコロナ禍による作業の遅滞などありましたが、関係者の献身的なお働きにより、冒頭に書きましたように、具体的な作業に着手できるようになりました。決定した骨組みとしては、学院の建学の精神に始まり、法人の運営体制、大学と中高部教育課程と統括、教務、

学生支援、迎え入れと送り出しの変遷、めぐみ会やKCC-JEEを始め、キリスト教学校教育同盟、私大連、県私学総連合会など外部団体との関わりなどですが、作業の中で課題はさらに広がっていくものと想像されます。

では、なぜ、誰のために、何を期待して、年史を編纂するのでしょうか。もちろん、節目だから、他の法人でも作成するからといった素朴すぎる理由を書くというわけではありません。まず、その法人の立脚点を再確認するという意味があります。原点の所在を共有する作業です。私は、神戸女学院の校舎群が重要文化財に指定された折り、修理は基本的にオリジナルに戻すこととの理念を伺いましたが、年史編纂の意義との重なりを覚えました。後に続く人に、原点と現状をできるだけ直に(線だけでなく、面も、立体もあるだろうが)つなげられる手がかりを提供する、と。その意味では、「戻す」ということも、単なる逆進ではなく、新たに元来の装備を調え直す「進化」もしくは「深化」なのだと考えます。その関連で、生徒、学生、卒業生、ご家族も含め関係者、そして教職員が、個人的な決断を行う際の行動モデルともなりうるでしょう。さらにキリスト教学校であること、女性教育機関であること、小規模の運営体であることが織りなす足跡が、社会全体に送るメッセージも小さくはないと思います。

私が少しばかり学んだ古典ヘブライ語(旧約聖書の言語)は印欧語と異なり、過去・現在・未来の区別を明確にもたない、それらを切り分けられない言語だといわれます。現代の私たちの思考とは異なる時空間に身を置いていたということです。過去に生きる者が現代の人にも影響を与え、やがて地上の歩みを終える自身も未来に生き続ける—そのような当事者意識のある観念を懐いていたと申します。編纂作業に従事するいま、過去を現在に、また現在を未来に活かす精神性の必要を感じています。学院史料が先達の想いをも含めて未来に重要な資料と情を送り渡し、将来の女学院生を、神戸女学院を、また志を共有する人をも応援する年史作成を目指してまいりたく存じます。